

高山

たかやま

高山の原生林を守る会

会報 第 131 号

2024年 12月



第 195 回観察会 高松山・峨嵋山 陽だまり里山観察会

11月24日に第195回高山の原生林を守る会観察会・陽だまりの里山観察会を実施しました。参加者は20名でした。前日の小雨から一転して、小春日和の陽ざしに恵まれました。今回はコロナ禍で中止していた芋煮会も4年ぶりに復活しました。

登山口までは舗装道路歩きですが、カナムグラの果実やイヌヨモギの虫こぶ、ヤマグリの果実や黄葉したアオハダ、イタヤカエデなど観察ポイントは満載。登山口からはナガバノコウヤボウキ、オケラなどの林床植物も観察しながら高松山へ。

高松山に芋煮セットを置き、幹事の方々に準備のお願いをして、奇祭水かけ祭りの起源の地、杵沼へ。沼周辺の湿生植物を観察した後、峨嵋山へ。峨嵋山の岩場からはは島のような信夫山の眺望が楽しめました。ヒメヤシバシの果実の様子を観察していると、芋煮ができたとのお知らせがきて、高松山へ急いで戻りました。福島県と山形県の2種類の芋煮の味は舌鼓を打つ皆さんの表情に表れていました。幹事の皆さんお疲れさまでした。

帰り道、傾いた陽ざしに黄葉が映える斜面で紅一点、茜色に染まったカマツカが参加者の目を引いていました。和やかな雰囲気、里山を構成する木々の美しい風景と林床に植生する植物の晩秋の姿を楽しみました。



自然林黄葉の煌めき



工業団地に隣接する高松山



峨嵋山から福の島:信夫山

第 195 回高山の原生林を守る会自然観察会
～高松山・峨嵋山 陽だまり里山観察会に参加して～

丸山吉子

前日の小雨から一転、秋晴れの澄んだ青空の元、集合場所の小鳥の森へ向かいます。入口付近の紅葉も見頃で、始まりから秋を満喫です。今回は4年ぶりの芋煮会も復活とのこと、とても楽しみです。

“しおり”をいただき、いざ出発地点の岡島「鹿島神社」へ移動。この鹿島神社は毎年テレビのニュースでも取り上げられる奇祭“水かけ祭”で有名な神社だと初めて知りました。車道を歩き出すと、カナムグラが一面を覆う土手で虫コブを観察。

登山道に進むとエンコウカエデの美しいグラデーション。ナガバノコウヤボウキ(長葉の高野箒)の前では葉の形についての談議(何故ハート? 虫食い?! (笑))。オケラ、ヤマイモの実も観察しました。紫シメジも見つけました。キノコ汁にしたら、さぞかし美味しいでしょうに…未だセシウムが高いのです…と、代表の説明。〈山からの恵みですのに哀しい事です〉

開けた落葉広場で「皆さん、この大きな木は何の木でしょう?」葉を手に取り、木を見上げ、「ん〜コレはウワミズザクラの大木ですね。」「落枝痕が見えますね」と、専門的な解説。林床には①ミズナラ②コナラ③クリ④クヌギの落ち葉。《里山の四兄弟》と言うそうです。〈なんて素敵な例えでしょう!〉。近くにはヒヨドリジョウゴの赤い実がたわわ。「クリスマスリースに使ったよ」と、仲間の声が。〈楽しい!〉

ゴツゴツした岩場のトラバースもあり登山気分を味わいつつ、急坂を登りきって高松山山頂へ。山頂で幹事の方々が芋煮を準備してくださるとのこと、我々は、峨ろう山へ進みます。途中、ヤマツツジが季節はずれの花を咲かせていました。温暖化で休眠できず咲いてしまうとのこと。〈何だかせつない〉

“水かけ祭”発祥の池「杵沼(きぎぬま)」では、ギボウシの果実やアブラガヤを観察。小峨ろう山の岩場からは、福島盆地に浮かぶ信夫山越しに雪を戴いた吾妻〜安達太良の絶景が望めました。ヒメヤシャブシの可愛いらしい果実を観察し、急ぎ足で高松山山頂に戻ります。

山頂での芋煮は、山形風牛肉醤油味、福島定番豚肉味噌味の贅沢2種類! それは、もう! もう! 最高でした。帰り道、午後の柔らかな日差しを浴びた林が黄金色に輝いていました。おなかも心も満たされ、晩秋の里山に魅了された観察会でした。幹事
煮の準備、鍋やコンロの荷揚げ、ほんとうにありがとうございました。



杵沼にて



ウワミズザクラを観察



カナムグラ



ムラサキシメジ



エンコウカエデ



ナガバノコウヤボウキ



ヤマツツジ 眠れない花



芋煮

西吾妻山登山道保全活動報告

西大巔～西吾妻山間登山道保全現地調査 2024.08.23(金)



根巻シート施工を点検

環境省が主催する令和 6 年度国立公園満喫プロジェクト西大巔～西吾妻山間登山道整備事業として 9 月 23 日に実施される登山道整備の準備のため、グランデコから西大巔を経由して西吾妻小屋までを踏査しました。参加者は裏磐梯自然保護官事務所、福島県自然保護課、アドバイザー各 1 名、アジア航測株式会社 3 名と併せて 7 名でした。

西大巔山頂で早めの昼食を取り、西大巔崩壊斜面のこれまでの作業箇所を丁寧に観察。このエリアは昨年 9 月、今年 6 月と 2 回にわたって保全作業を実施し

ています。当初の方針はチングルマの崩壊断片を植生回復の資源として断片のあるエリアを根巻シートやヤシネットで土留めを敷設し流亡を防止することでした。

結果は狙い通りで早くも植生回復傾向が確認されました。特にミヤマコメグサの群落があちこちで発達しており、見事でした。おそらく表層が安定した効果ではないかと思われます。そして、うれしいことに 6 月に試験的に挿し木しておいたチングルマが高い確率で活着していました。これは予想以上で来年から本格的に植生回復作業に組み込むことにしました。その前に法的な手続きが必要になります。

今回の現地調査で西大巔直下の急斜面はチングルマを活用した植生回復の可能性があると分かり、当面はこの一帯でチングルマを中心とする高山植物群落の再生のために作業を集中することになりました。

2022 年から手探りで始めた保全作業でしたが、この場所にあった近自然工法の確立に希望を持た一日となりました。下山時に、登山道の洗堀が激しい箇所がありました。こちらの保全作業はグランデコから西大巔山頂間の管理者が未設定であるためその手続きが済んでからになります。



ミヤマコメグサ



チングルマの挿し木



地衣類マットで植生が回復

西大巔登山道保全作業 2024.09.23(金)



西大巔山頂で資材確認
(撮影:みゅーさん)

環境省が主催する西大巔登山道保全作業に参加してきました。今回の作業は環境省の国立公園 Stepup25 事業・登山フィールド部会のモデル事業として実施されているもので、今回で 3 回目です。登山者(一般公募ボランティアと高山の原生林を守る会)、環境省パークボランティア、グランデコ職員、山形県、アドバイザー、黒沢福島大学教授、裏磐梯自然保護官事務所、アジア航測併せて 38 名の参加があり、これまでの最多の参加者でした。

山頂で荷揚げした資材を確認し、2 班に分かれて直下の登山道整備と崩壊斜面の植生保全作業を行いました。一般公募ボランティア参加者と高山の原生林を守る会は植生保全作業を担当しました。集合場所のグランデコ駐車場では青空も見られましたが、中腹から雨が降り始め、その後、やむことはなく、これまでで最も過酷な天候での作業でした。

山頂直下の登山道整備は石を詰めたヤシネットを埋め込み、ステップを作りました。下に一旦下りて石を詰め、直下まで持ち上げる作業は大変だったと思います。植生保全作業は、最初の崩壊地帯に集中しました。6 月に設置した流れ止めの根巻シートに石を詰め直し、さらに上部に流れ止めを設置しました。

冷たい雨が降る中での作業であったため 12 時前に作業を終え、下山しました。下山後はグランデコさんに暖房を入れたレストランを開放して頂き、冷え切った体を温め、昼食をとり、作業内容を総括し、解散しました。



冷雨の中で作業



びしょぬれ(撮影:きいさん)



作業後

西大巔～西吾妻山間登山道誘導ロープ取下げ作業 2024.10.20(日)



作業を終えて(西大巔山頂にて)

を短く切るのが今回の作業でした。

19日(土)に実施する予定でしたが、荒天のため20日(日)に延期しました。20日は南下した寒気の影響で冬山並みの寒さの中での作業でした。

西大巔山頂までの登りは直登ルートでなかなか手ごわいです。今回は健脚組と普通組に分けて登りました。普通組のペースはYAMAP標準でしたが、山頂についた時は西大巔斜面の作業はすべて終わっており、水場先でようやく追いつきました。健脚組、恐るべしですが、そのおかげで予定していた作業を終えることができました。

地衣類ネットを張った斜面では上部のヤチスゲやコセイタカスギゴケがネット下に繁殖したエゾスナゴケの中に再生しているのが確認されました。コケマットの形成を促進することで崩壊斜面の植生回復を早めることが期待できることが実証されたようです。

西吾妻小屋で昼食をとり、霧氷をまとった吾妻連峰の山並みと湿原を眺めながら西大巔へ、山頂直下の植生回復エリアでは20代トリオがやり残した竹ぐしの打ち込みをしてくれました。

西大巔山頂で集合写真を撮り、めいめいのペースで下山し、無事に今日の作業を終えました。

10月20日(日)に西吾妻登山道誘導ロープ取下げと先月実施した整備作業の補修作業を行いました。参加者はYAMAPでのボランティア募集に応募していただいたYAMAPPer4名、裏磐梯自然保護官事務所2名、高山の原生林を守る会3名併せて9名でした。

ロープを鉄杭につないだままですと雪の重みにより杭が曲がってしまいます。また根巻シートを止めた竹ぐしが長いままですと雪の重みで抜けてしまいますので、ロープの取り外しと竹ぐし



ロープは凍っていました
(撮影:きりさん)



地衣類マットで植生が回復



竹グシを短く切り戻しました

ブラジル紀行4

佐藤 守

7 セーハ・ド・マール クラーロ川熱帯雨林

2024年1月10日(水:現地)にMasuji Kayashima氏にセーハ・ド・マール(海岸山脈)から流れるチエテ川源流に残るマタ・アトランチカ(大西洋熱帯雨林)を案内して頂きました。

そこは、1935年にチエテ川にポンテ・ノバダムが建設されて以来、そのまま保存されてきた森です。このダムの水が大都市サンパウロの水源となっており、保安上の問題から一般人の立



クラーロ川熱帯雨林を散策



クラーロ川流域位置図

入はもとより水源となる樹木の伐採等も禁止区域となっています。そのため、壊滅状態のマタ・アトランチカの熱帯雨林の中で90年間、人的影響のないまま維持されてきた大変貴重なエリアです。

海岸山脈からチエテ川に流れこむクラーロ川下流に設けられたクラーロ浄水場(サンパウロ州サレゾーポリス市 Salesópolis)から海岸山脈に向かって管



締め殺しの木

した Ficus が成長し、パラナマツを囲い込んでいるようです。車で移動し、本格的な熱帯雨林に入ってから歩き始めました。管理道周辺ではパウミットヤシ (*Euterpe edulis*) が林立し、はるか樹上の枝に着生するランの根が簾のように地上をめがけて下りています。この様子はピッコ・デ・ポン・デ・アスーカルでも見られた、まさに熱帯雨林ならではの光景です。これは、高木が多い熱帯雨林に適応したランの拡大戦略です。パウミットヤシは若い茎の部分がタケノコのような食感があり、食材として伐採が進み、絶滅が危惧されているヤシです。

うっそうとした高木の主幹部はブロメリアやランなどの豊かな樹皮植物の世界が発達しています。中には果実をつけた着生サボテンも。そのサボテンはサンパウロ大学の街路樹にも着生していました。管理道の両脇では、朽ち落ちた枝で数種類の着生ランが観察できます。時折、大型の青い蝶が頭上を舞っては森に消えていきます。何度か撮影を試みましたが、動きが速く、その姿は捉えられませんでした。

原生的な森だけあって、*Oncidium* や *Epidendrum* 等のラン類は勿論のこと、日本でもお馴染みのベゴニアやフクシアなどの原種や自生植物の美しい花々が途切れることなく、見るものすべてが好奇心を刺激します。日本では見られないマタ・アトランチカの植物



マタ・アトランチカのラン

8 ミクロランと Masuji Kayashima 氏

ミクロランはブラジルを中心に分布している花の大きさが 2 ミリ程度の小さな着生ランです。東南アジアや他の熱帯林には植生しておらず、研究者も少ないため、繁殖方法等まだまだ不明な点が多いランです。Masuji Kayashima 氏は在野にありながら、繁殖技術の第一人者です。その功績は欧米の研究者にも注目



Masuji & Laura Kayashima



Miltonia spectabilis semi-alba "Laura Kayashima"
Masuji氏が発見し、奥様に献名



お世話になった Kayashima 夫妻

理道が走っています。Masuji Kayashima さんは 50 年にわたってこのエリアのラン、特にミクロランの調査をしてきました。今回は Masuji さんに、この管理道への立入り許可の手配をして頂きました。Masuji さんご夫妻、水処理会社の自然研究員 1 名、私とパートナー 5 名で森を散策、Masuji さんに管理道路周辺の植物の説明をして頂きました。

管理道入口の川のほとりではパラナマツを締め殺すマメ科の木の姿に驚かされます。よく見るとパラナマツの主幹に着生



着生ランの根



パウミットヤシ



ブロメリア



Capsicum buforum



Barbosella miersii
(ミクロラン)



Masuji 氏宅のシバグリの巨木、約 60 年生
(接木で育成)

されています。訪問した時は、モジ・ダス・クルーゼス市の援助を受けて、これまでの研究をまとめた本を出版されたばかりでした。

また、落ちた樹木上の着生ランを伐採された森に移植する等、マタ・アトランチカの復興にも力を入れています。

東部学習センター会議室

吾妻・安達太良花紀行 99

佐藤 守

ミヤマウグイスカグラ(*Lonicera gracilipes* var. *glandulosa* スイカズラ科スイカズラ属)

吾妻・安達太良連峰のクリ-コナラ林からミズナラ林の湿り気のある林縁や沢沿いで株立ちする落葉灌木。日本固有種。ウグイスカグラと本種はヤマウグイスカグラの変種である。本種は日本海側に多く分布し、茎、葉、花に腺毛を持つ。ウグイスカグラは無毛。ヤマウグイスカグラは毛じが多く腺毛は少ないとされているが、ヤマウグイスカグラとミヤマウグイスカグラの区別は難しい。吾妻・安達太良連峰では無毛のウグイスカグラに会うことは無いが、腺毛の多い株に会うことも少ない。

命名の由来はウグイスの鳴くころに花が咲き、ウグイスが隠れるような株立ちになることから、ウグイスカグレが変化したものとされる。

葉は対生。葉身は広楕円形で、短い葉柄に毛と腺毛がある。葉色は濃緑色。表面に毛がある。先端は鋭く尖り、広い楔形で葉柄に流れる。全縁で鋸歯はない。縁には疎毛がある。

花は腋性。葉の展葉に先立って葉腋から花柄を延ばし、漏斗状の合弁花を 1、2 輪咲かせる。花冠は赤みを帯びたピンク色で先端は 5 裂する。雄しべは 5 個で花冠より短い。葯の色は赤紫から黄緑色に変わる。雌しべは花冠から突き出る。柱頭は淡緑色。初夏の頃に赤い液果を熟す。

昔の農家の庭先には山採りされたウグイスカグラが植えられていた。お菓子などはない時代。赤く透き通ったウグイスカグラの液果は甘くてすこぶるおいしかった。ウグイスカグラとは言わずに「グミの木」と言っていた。山登りを始め、写真撮影を始めてからウグイスカグラの名と果実が昔食べたものと同じであることを知った。しかし、山のウグイスカグラに赤い実がたわわについているのを見たことがない。オナガやカケスなどの留鳥の好物らしいので、いち早くごちそうになっているのかもしれない。



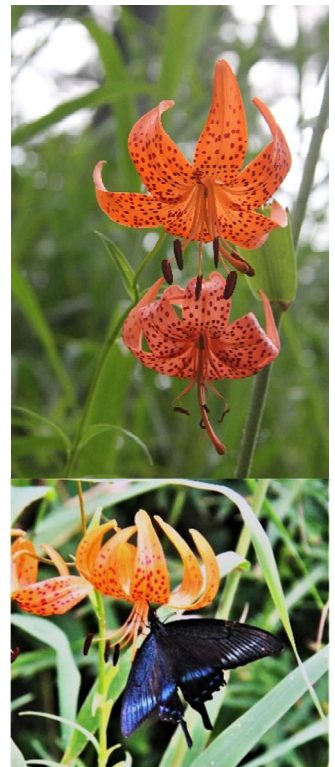
コオニユリ(*Lilium leichtlinii* ユリ科ユリ属)

吾妻・安達太良連峰の高層湿原とその周辺の草地に植生する多年草。大輪の花を咲かせるユリ属の植物としてはヤマユリ、オトメユリ(ヒメサユリ)、クルマユリ、コオニユリがあるが、コオニユリは山岳ではあまりお目にかかれないのではないだろうか。なお、オニユリは中国から帰化して栽培されたものが野生化したもので対馬以外は自生していない。また、オトメユリは安達太良連峰では認められない。

葉は互生。葉は無柄。他のユリ類と比較して葉の形は明らかに異なり、線状披針形、細長く、先端は鋭くとがる。葉縁は全縁で鋸歯はない。環境に敏感で、日陰に生育する個体では葉数が少なく、一層細長くなる。オニユリは葉腋に黒いムカゴを着けるがコオニユリは着けない。

花は頂性。直立した茎の先端に総状花序を形成する。花は茎に対して左巻きに着生する(花の左上側に次の花が着く)。各葉腋に生じた花柄の先に 1 個の花が着生する。開花は下から上へ咲きあがる。花冠は 3 数性で外花被片、内花被片各 3 片。花被片は大きく反転し、花色はオレンジ色で、黒紫色の楕円形の斑紋が多数点在する。雄しべは外花被片と内花被片の中央に各 3 本着生する。葯は褐色～赤紫色、花糸の基部は淡い緑黄色で先になるに従い淡い橙色となる。花粉には強い染色力があり、着くと脱色しにくい。雌しべは 3 本が 1 本に合着した複合雌しべである。花柱は基部が薄い橙色で先端になるに従い橙色となる。柱頭はオレンジ色である。子房は 3 室からなる。キアゲハとミヤマカラスアゲハが主たる訪花昆虫で、種子から花の着生までは最短 3 年を要する。

ロープ設置ボランティア作業の帰りの湿原で、細い葉を巻くように着けた植物に出会った。心当たりのない姿であった。夏のある日、その正体を確かめるべく再訪したところ鮮やかな大輪を着けたコオニユリであった。折しもカラスアゲハが吸蜜活動中でこれ以上ない美しいコラボを堪能できた。



2025 年自然観察会計画

回数	月日	候 補 地	テ ー マ	集合 時間	解散 時間	担当者
196 回	2/16(日)	野地温泉から土湯峠: 集合場所 四季の里正面入り口駐車場	雪上のブナ林観察	8:00	15:30	奥田 博 渡邊アヤ子
197 回	4/27(日)	口太山 集合場所 「若松崎展望台」駐車場	早春の植物観察	8:00	15:30	渡辺京子 松井さき子
198 回	7/13(日)	鎌沼 集合場所 四季の里正面入り口駐車場	夏の高原植物観察	8:00	15:30	青柳静子 渡邊アヤ子
199 回	11/23(日)	大館山(立子山) 集合場所 「若松崎展望台」駐車場 総会会場	芋煮会と総会 渡利学習センター	8:00 13:00	12:00 16:00	松井さき子 五十嵐礼子

第 196 回自然観察会 野地温泉から土湯峠 雪上のブナ林観察会

日時：2025 年 2 月 16 日（日）8：00～15：30

集合場所 四季の里正面入り口駐車場

集合時間 8:00 参加定員 20 名

内容 野地温泉裏の冬のブナ林を散策し、フィールドサイン、冬芽等の春を待つ森の表情を観察します。
準備するもの 昼食、登山靴・長靴等、雨具、スパッツ類、防寒具、帽子、防寒手袋(+毛手袋)、着替、ゴミ袋、筆記用具、メモ帳、冬季歩行用具(スノーシュー、カンジキ、スキー、ストック)

*装備、その他不明な点があれば申し込み時にご相談下さい。

参加費用:保険代(500 円)、申し込み:2 月 14 日(金)まで佐藤守(024-593-0188)へ電話またはメールにてお願いします(電話申込は午後 7 時～9 時でお願いします)。

2025 年カタクリの会奥羽自然観察会計画

月日	曜 日	回 数	テ ー マ	観 察 地(集合時間・場所)	カタクリの会は自然観察会を目的とした会で、どなたでも参加できます。参加申込は各観察会の 1 ヶ月前から電話で受け付けます。 天候などの状況によって観察地の変更もあります。 参加費は 500 円 通常は午前中開催となり、12 時解散となります カタクリ通信を偶数月に発行しており、希望者には年間千円で年 6 回送付します。 (郵便振込:カタクリの会 02350-5-38765) 連絡先 代表 瀬川 強 〒029-5512 和賀郡西和賀町川尻 41-72-15 電話 0197(82)3601 email:tsuyosi.segawa1954@gmail.com
1/19	日	409	冬の生き物	廻戸周辺(10 時:湯夢プラザ)	
2/9	日	410	雪の自然観察	雪国文化研究所(10 時)前日雪あかり	
3/16	日	411	春を見つけよう	ツキザワの家周辺(9 時:ツキザワの家)	
4/27	日	412	カタクリの里歩き	無地内周辺(9 時:ツキザワの家) 春の企画展	
5/11	日	413	夏の渡り鳥	ツキザワの家周辺(9 時:ツキザワの家)	
6/15	日	414	新緑の森	ツキザワの家周辺(9 時:ツキザワの家)	
7/13	日	415	夏の花と虫	ツキザワの家周辺(9 時:ツキザワの家)	
8/17	日	416	水生生物と沢歩き	ツキザワの家周辺(9 時:ツキザワの家) 夏の企画展	
9/14	日	417	木の実と秋の花	ツキザワの家周辺(9 時:ツキザワの家)	
10/12	日	418	落葉とキノコ	ツキザワの家周辺(9 時:ツキザワの家) 秋の企画展	
11/2	日	419	冬の渡り鳥	錦秋湖周辺(9 時:湯夢プラザ)	
12/7	日	420	初冬の森	西和賀町内(9 時 30 分:湯夢プラザ)	

振込による会費の納入は、郵便振替 02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」へ

「高山」高山の原生林を守る会会報 第131号 2024年12月発行

編集・発行：高山の原生林を守る会 HP:<http://adumatakayama.justhpbbs.jp/index.htm>
(URL が変わりました)

代表連絡先：佐藤 守 Phone 024-593-0188(夜間7時～9時)

郵便振替：02170-0-24351 「高山の原生林を守る会」

入会方法：年会費(1000円)を添えて上記まで

編 集：佐藤・奥田